

二、福生市の板碑について

大正十二年十一月二十六日、市内原ヶ谷戸の井上家で屋敷畑から一枚の石片を掘り出した。それは上部が一部欠けてはいたが、「貞和四年（一三四八）十月日」と刻まれ、仏の種子や、天がい、ようらく、花瓶までも刻まれた見事な板碑であった。やがて、それは清岩院墓地に移してねんごろに供養して現在に至っている。また、市内の長徳寺、福生院、千手院の墓などにも、ひっそりと祀られていたものの、殆んどが風雨にさらされていたり、或は土中に埋れたまま放置されていたものもあった。板碑は、私達の郷土の歴史を語りかけてくれる貴重な文化遺産であり、大切に保存しなければならぬものです。

いま福生市には書かれた中世の史料は、ほとんど存在しないといても過言ではない。しかし史料がないということは歴史がなかったことを意味している訳ではない。古代の先人を物語る縄文土器の出土とともに、現存する板碑の数々はまことに得難い中世唯一の史料といえましょう。

福生の板碑については、昭和三十二年六月、福生第二小学校の小野沢博一教諭が『福生町板碑集録第一集』として、紀年銘のわかるもの二十五基と年代不明のもの及び断片十一基を発表され、それには、『福生町誌』（昭和三十五年刊行）に詳細報告されている。

その後、「福生町文化財調査会」（昭和四十年四月結成—会長森田潤三）では、それらに基いて、ひとつひとつ拓本を採り確認、記録したうえ、新発見分を含めて三十五基と断片など十基が、町内に保存されていること

を、確認して来た。そしてそれらは「福生町現存板碑表」として、昭和四十二年十一月第三回文化財展示会において発表報告した。

近年「板碑」は、貴重な文化遺産であり郷土の歴史を秘めた文化財であることの認識が高められるとともに、更に新資料も報告されている。たまたま、東京都教育委員会においても、都内全域板碑の調査を実施することになり、「東京都板碑調査団」（団長、東京学芸大学名誉教授、千々和実）を結成し、昭和四十八年度は、西、南多摩地区内の精査が実施された。

当市においてもこの調査を実施しましたが、ここにその市内調査の成果を記録し、報告するものであります。

調査員 立川愛雄、加藤有孝、田村光男